

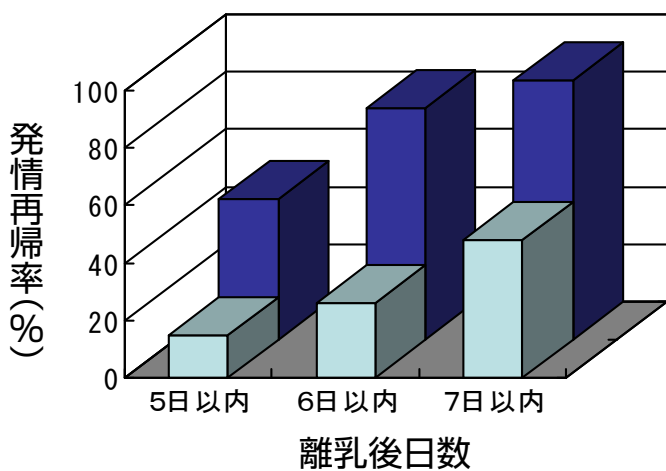
混合飼料フィードメラインシリーズについてーその2

前号に引き続き、フィードメライン-Nについてお話しします。前号では、妊娠豚にフィードメライン-N添加飼料を給与することで、子豚の離乳時体重が改善した事例を紹介しました。乳質の改善効果は搾乳牛を想定したフィードメライン-MI添加飼料給与事例でも明らかになっています。たとえばE牧場の事例では、給与区の牛乳1mL中の体細胞数が平均11.4万個であったのに対し、対照区は平均40.6万個でした。体細胞は乳房の炎症に由来しています。

ブロメラインの効果はこれだけではありません。それは、平均発情再帰日数が改善することです。前号でも紹介したA農場(図1)の事例及びD農場(図2)の事例です。D農場は対照区に他の混合飼料添加飼料を給与し比較しました。本事例では、生時体重は対照区に比べやや大きくなる傾向がありましたが、離乳体重では差が認められなかったケースです。残念ながらB・C農場ではこのデータはとりませんでした。A農場では図のように発情再帰率は給与区が対照区に比べて優れていることが判ります。5日以内の発情再帰が給与区48.8%、対照区14.8%、6日以内のものがそれぞれ、80.5%、25.9%、7日以内がそれぞれ、90.2%、48.1%でした。平均発情再帰日数は給与区5.73日に対して対照区8.26日で有意に改善が認められました。また、発情再帰90%到達日は給与区で7日、対照区で12日でした。

D農場において平均発情再帰日数は、給与区が5.64日、対照区が7.85日と明らかな改善を示しました。

上述した発情再帰日数が改善する機序はよくわかりませんが、前号で述べましたブロメラインの様々な効果が総合された結果ではないかと考えられます。このように繁殖母豚の回転率改善につながる効果が期待されるので、限定はしていませんが、フィードメライン-Nは母豚用という位置づけをしています。



平均発情再帰日数:給与区5.73±1.78

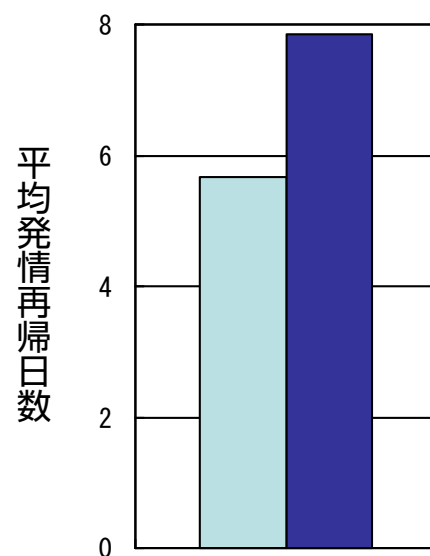
対照区8.26±3.08

発情再帰90%到達日数:給与区 7日

対照区12日

分娩舎において給与区は0.5%フィードメラインを添加した飼料を給与、対照区は無添加の飼料を給与した。

図1 A農場における発情再帰日数



■ 給与区n=30 □ 対照区n=30

分娩前1週から分娩後21日まで、給与区にはフィードメライン-Nを0.5%添加した飼料を、対照区には他の混合飼料を添加して給与した。

図2 D農場における平均発情再帰日数

片やフィードメライン-BGはやはり限定はしていませんが、肉豚用という位置づけをしています。本製品にはプロメラインの他に甘草エキスを主成分に加えました。いよいよ漢方薬のようになりましたが、甘草エキスにはグリチルリチンが含まれております。グリチルリチンにはミノファージェン製薬でおなじみのように次のような様々な薬理作用があります。強肝作用、抗炎症作用、鎮静・鎮痙作用、抗消化性潰瘍作用、抗アレルギー作用などが認められます。これらの中で特に注目したのが抗ウイルス作用です。現在、肥育期間に豚の調子が悪いあるいは注射すると健康状態が崩れるなどの理由でワクチン注射を控えられるケースがあります。こうした事例ではそのとき良くても、出荷間近の肥育豚に本来免疫が必要であった疾病により事故が発生する場合があります。ですから、それぞれの農場に必要なワクチンは確実に使用することが望ましいわけです。こうした背景には、サーコ2型ウイルスなどのワクチン注射による免疫的な刺激によって動くようなウイルスが関係していると考えられます。そこで、グリチルリチンの抗ウイルス作用に期待したわけです。フィードメライン-BG添加飼料給与によりウイルスの動きを抑制し、ワクチン注射が可能な状況を作り出すとともに、グリチルリチン及びプロメラインの免疫調整作用に期待して、ウイルスの蠢動によりかく乱された豚の免疫系を整えてワクチンテイクを図れないかと考えました。従って、本製品の使用時期は図3のようになるのではないかと思います。現在、各地で試験的に本製品をご使用いただき、評価していただいております。既に、子豚の事故率が前月30%を超えたものがフィードメライン-BG添加後の1ヵ月は15%台であったなどのお声を伺っております。今後、その本領であるワクチン注射による抗体応答で効果が確認できましたら、またご報告したいと存じます。

